

阪神間に6教室展開している第一ゼミナール久保塾は、業務上の課題を多数抱えていた。そこでFLENS株式会社の「FLENS School Manager」を導入。結果として、現場スタッフの業務効率は格段に向上し、生徒対応に集中できる体制を確立。取締役本部長の坂元健良氏と運営部門長の小鴉大輔氏に、具体的な変革について取材した。



坂元健良氏

——コロナ禍もありましたが、近年、御社の取り組みにはどのような変化がありましたか。

坂元 1984年に創業した当塾は、大阪に1教室、西宮に1教室、神戸に4教室展開しています。小2、高3を集団または個別で指導していますが、集団に関しては開塾以来、正社員が指導することにこだわってきました。また2017年にはウィザスグループにグループインして、新たな出発をしています。



小鴉大輔氏

小鴉 かなりの時間や労力を、電話対応に割かれていました。保護者との電話はなかなかつながらず、休憩に入ったら電話をし、つながらなかつたらまた次の休み時間に電話をするの繰り返しでした。数分のことかもしれないませんが、長い目で見れば、むしろです。

坂元 そこで3年前に、他社の業務管理アプリを導入しました。懇談ウィークが近づくと、面談予約の電話が鳴り響いていたのですが、そういうことがほとんどなくなり、休憩中や授業終わりなどに生徒対応できる時間が増えました。

小鴉 スクールマネージャーで上げる「ほメール」の成果

——ほかに、最近変わったことがあればお聞かせください。

坂元 子どもたちのモチベーションを上げたいと、学習態度をはじめ様々なことを日常的にメールで褒める「ほメール」という取り組みを久保塾では実施しています。

——「ほメール」の質を高めるべく、上手に褒めている社員に関しては本部からも褒めることにしました。これ

——スクールマネージャーのどのような点がよかったのでしょうか。

坂元 スクールマネージャーは機能が充実しているだけでなく、画面がシンプルで一覧性が高い。しかも、リーズナブルという点に惹かれて導入を決めました。

現場も本部も業務効率がアップ

——スクールマネージャーに切り替えてみて、いかがですか。

小鴉 以前は点数がよかった生徒の保護者に電話をすることもあったのですが、スクールマネージャーに切り替えてからは「お知らせ配信」

をメインにできていて、業務効率がアップしています。

以前利用していた他社サービスには機能がたくさあつたので「この字を大きくして、この字は赤くして」といろいろこだわってしまうこともありました。その点、スクールマネージャーはシンプルなので、機能にとらわれず業務に集中できています。余裕ができた今は、「ほ

メール」の送信時間を朝にしたほうがいいのか、昼にしたほうがいいのかなどいろいろ試行錯誤できています。

坂元 本部としても、上手な「ほメール」を見つめるのが楽になり、社員を激励しやすくなりました。

9月にはスクールマネージャーに切り替えてから初めて社員の表彰をおこなったところ、負担が軽くなったことを実感しました。表彰は送信件数の多さや、保護者のリアクションの多さなどを指標にしているのですが、社員のモチベーションアップにつながっていると感じます。

また、いい「ほメール」は社内でも共有し、その質を高められています。

さらに当社では、外注した独自の出納システムを使用しています。以前は入金情報などを他社サービスと自社システムの両方に入力する必要がありました。スクール

マネージャーはその出納システムと連携できていて、二度手間が不要になりました。これもかなり助かっています。

——社員や保護者の反応はいかがですか。

坂元 社員は抵抗なく使ってくれています。時々「この使い方がわからない」と言ったりしていますが、ヘルプ機能が充実しているので自分で解決しています。

小鴉 保護者に関しても、スムーズに移行できました。アプリの導入が必要だったものの、1週間で約9割の保護者が登録してくれ、2週間後にはほぼ全員が使えるようになりました。サポートも手厚く、安心して切り替えられました。

業務効率化で更なる「コア業務への集中」

——今後の展望をお聞かせください。

坂元 私たちは、「人は人によつてしか育たない」と確信していますので、周辺業務にはデジタルをどんどん導入し、空いた時間は生徒対応のような、人の温もりが必要なコア業務に集中していきたいです。

実際、スクールマネージャーによつてそれを推進することかできました。このシステムを使えば、業務がかなり楽になると感じています。

